

目的：革及び人工皮革で作成した婦人靴の歩きやすさ、適応感等履心地の良否、また、長時間履くことによる靴の寸法変化、形態変化及び損傷等につき試履を行った。

方法：試履のモニターは8名で、革靴はバルカンソピア、人工皮革靴はブロンズエクラリーノを材料とし、モニター1人につき材料の異なる同型の靴2足で、これらの靴の適応感を、試履前、試履後1(モニターがその靴に慣れた時)試履後2(試履期間平均半月以上)にフィッティングチェックを行った。また、各靴左右28項目(主に靴の長さ及び厚さ)について計測を行い試履前後の形態寸法の比較を行った。

結果：試履に要した日数は、革平均23日、人工皮革24日で、その全歩数は平均116194歩(革)、及び11952歩(人工皮革)であり、その1日平均は革4638歩、人工皮革4588歩で、1日平均歩行距離は両者共約3Kmであった。フィッティングチェックした結果より各靴の適応感を見ると試履前において革靴では、「びっぴりしている、あたる、少しきつめ」となっているのに対して、人工皮革靴では「あたる」という個所が多く、その表現も「いたい」とする例が多い。試履後においては歩行時に受けた障害箇所がいずれも試履前に対して多く、特に人工皮革靴では「きつい、あたる、痛い」など革靴より強い表現のフィッティングポイントが多い。試履後の靴計測では、トゥライン長さ革靴で1.7~4.6%、人工皮革靴で12~23%減少し、トゥ長さも13~33%減少していることからみて、各靴の長さは短くなったことが分る。これはトゥライン総周長が16~26%増加した結果からみても、試履後には各靴の長さが短くなり、幅が広く、厚さは靴の外側からトゥにかけて伸びが大きく変型することを把握した。